

北海学園大学 経済学部 2017

地域研修報告書



北海学園大学 経済学部

【経済学科・地域経済学科】

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 ……地域研修ガイダンス

2 ……地域研修 1 年間の流れ・研修地一覧・履修者数と実施ゼミ数の推移

3～24 ……地域研修ゼミ報告（2017年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加 21 ゼミ 履修者計 311 名）

3 浅妻ゼミⅠ
地域における再エネ活躍の条件
研修地／森町・伊達市・苫小牧市



4 浅妻ゼミⅡ、2 部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ
地域経済・産業の静脈部に関する研修
研修地／伊達市・室蘭市



5 内田ゼミⅠ・Ⅱ
留萌市のまちづくりに対する地域住民意識
研修地／留萌市



6 大貝ゼミⅠ
別海町の基幹産業の現状と課題を学ぶ
研修地／別海町



7 大貝ゼミⅡ
高知の田舎はなぜ元気なのか？を真正面から考える
研修地／高知県高知市・土佐市・四万十町・黒潮町



8 川村ゼミⅠ
学生アルバイトをめぐる問題
研修地／札幌市



8 川村ゼミⅡ
学生アルバイトをめぐる問題、労働組合、労使関係
研修地／札幌市



10 徐ゼミⅠ・Ⅱ・2 部徐ゼミ
外国人観光客誘致の実態調査：市民意識調査
研修地／旭川市



12 佐藤ゼミⅠ・Ⅱ
ニセコ町におけるまちづくり
研修地／倶知安町・ニセコ町



13 中園ゼミⅠ・Ⅱ
地域で求められる子どもの貧困対策を検討する
研修地／札幌市



14 西村ゼミⅠ・Ⅱ
東海道・掛川の経済・文化と「互産互生」の可能性
研修地／静岡県掛川市



15 濱田ゼミⅠ
人口減少社会と地域産業そして若年層
研修地／網走市



16 早尻ゼミⅠ
多様な森林利用に基づく山村地域の再生実践
研修地／中川町



17 古林ゼミⅠ
四日市公害の歴史的教訓と現代的意義を学ぶ
研修地／三重県四日市市



18 古林ゼミⅡ
足尾銅山鉱毒事件の現場を訪れ、現代への教訓を学ぶ
研修地／栃木県日光市足尾町・栃木市



19 水野ゼミⅠ・Ⅱ
朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修
研修地／幌加内町朱鞠内



20 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ
買い物難民問題の現状とその対策
研修地／滝川市・北竜町



21 宮入ゼミⅠ・Ⅱ
北海道稲作の現状と道産米販売戦略の方向性
研修地／新十津川町・深川市・旭川市・当麻町・比布町



22 2 部宮入ゼミⅠ・Ⅱ
地域農業振興と農協の役割－和寒町を事例に－
研修地／和寒町



23 山田ゼミⅠ
富良野のブランド力はどのように維持できているかを探る
研修地／富良野市



24 山田ゼミⅡ
東京の北海道ブランドを探り、草津温泉から学ぶ
研修地／東京都・群馬県草津町



25 ……地域研修報告会

2017年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部 部長

佐藤 信



「地域研修」は2003年の地域経済学科開設と同時に開始した科目です。当初は地域経済学科の独自科目として位置づけてきましたが、経済学科でも複数のゼミで実施するようになり、経済学部と地域社会との関わりを深める科目として発展してきました。最近では、地域を対象とした課題解決型科目あるいはフィールドワーク科目として内外で注目される存在ともなっております。

地域研修のテーマも年々多様化し、研修先も北海道内にとどまらず、遠く沖縄まで拡大しております。研修内容も、自治体調査に加えて、住民へのアンケート調査、企業訪問などと広がりを見せており、その成果は、学内での「地域研修報告会」や「地域研修報告書」のほか、研修先での地域報告会を通して還元しております。

地域研修には以下のような意義があると考えます。第一に、1～4年次にわたるゼミ活動にあつては、地域社会の一層の理解のためにはゼミと一体で取り組まれる地域研修が有効であること。第二に、地域研修の実施においては、学生たちの相互協力による準備、研修先における苦労や喜びの共有、これらを通じた学生たちの成長が期待できること。第三に、成果報告のためのプレゼンテーション資料や報告書の作成は、単なる既存資料の利用にとどまらずに、学術的にも価値のあるオリジナルな成果をもたらす可能性を有していること等が挙げられます。

今後、「地域研修」の一層の充実のため、より長期にわたる地域研修の実施や2部カリキュラムへの導入等の検討をすすめているところです。

地域研修の実施にあたっては、何よりも、地域住民や自治体、企業・団体など多くの方々のご協力をいただいております。皆さまのご協力に対して、ここにあらためて厚く御礼を申し上げます。

地域研修ガイダンス

2017年4月15日 50番教室



地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学習が必要とされる複合的な学習です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

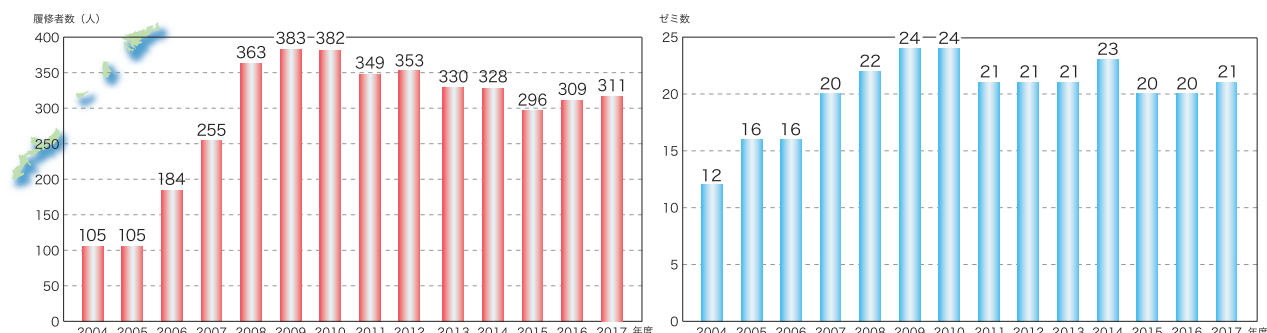
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。

研修地一覧



地域研修履修者数と実施ゼミ数



浅妻裕ゼミ

参加学生数 15名



浅妻 裕

経済学科
教授



伊達市木質ペレット製造プラント前にて

地域における再エネ活躍の条件

研修地：森町・伊達市・苫小牧市

●研修目的

近年、電力固定価格買取制のもとで再生可能エネルギーが普及し、各地域に大きな効果や少なくない課題を生み出しつつある。様々な方法による関連施設を視察しこのことに関する理解を深める。

研修先・日程

- 8月7日 北海道電力森地熱発電所
森町役場農林課
- 8月8日 伊達市木質ペレット製造プラント
北海道電力伊達発電所（火力・メガソーラー）
伊達ウインドファーム
- 8月9日 苫小牧バイオマス発電株式会社

写真① 地熱発電所のタービン発電機前にて。② 森地熱発電所で説明を受ける。③ ビニルハウス内の温水パイプ。④ 木質ペレット製造プラントの工程の一部。⑤ 北海道電力伊達ソーラー発電所。⑥ 苫小牧バイオマス発電株式会社。⑦ プラントにて説明を受ける。



●総括

本質的に分散型である再生可能エネルギーは、様々な事例が紹介されるように地域再生への切り札として注目されている。実際、視察した森町では、地熱発電から生み出される熱水を利用してハウス農業の暖房を行っている。設備の維持費はかかるとはいえ、燃料を購入することに比べて大幅に安いことから、端境期のトマト等の出荷は同地域農業の大きな強みとなっている。また、林地残材を用いた木質ペレットやチップによるバイオマスエネルギーの普及は、地域林業にとって貴重な収入源となっている。メガソーラーの場合でも、全道向け「送電線」ではなく「配電線」を経て伊達市内で利用されている（但し事業自体は北海道電力によるものである）。

一方、各地ではコスト問題を始めた課題が多々ある。地熱発電所は生産井等へのスケール（付着物）対策の費用が発生し、地熱発電の経済性や稼働率に影響を与えている。バイオマスは、林地残材を利用しているとはいえ、林業の人手不足の影響もありいわば資源の「奪い合い」のような状況も生まれている。中には木材を輸入しながら稼働するバイオマス発電所もある。メガソーラーや風力発電は地域の環境問題への配慮が必要となっている。

学生研修記

町田 慎一郎

経済学科2年
札幌藻岩高校出身



再生可能エネルギーによる地域活性化

事前学習の時点では再生可能エネルギー（再エネ）の定義や、それを用いた発電量といったことくらいしか分らなかった。しかし、現地での研修により、再エネと地域住民との繋がりや、どのような条件で再エネが地域経済を再生させうるかといった、インターネットや文献ではわからなかったことを学んだ。森地熱発電所では、発電所で利用した地熱水を森町の地熱利用園芸ハウスに無償で供給している。これにより販売価格が高い期間に合わせた促成栽培が可能となった。伊達市木質ペレット製造プラントでは、資源を伊達市等の森林から調達しており、苫小牧バイオマス発電所では、森林の未利用木材を有価で継続的に仕入れている。このようにバイオマスエネルギーの活用は道内林業にとって重要となっている。再エネは環境だけではなく地域経済にも効果があることがわかった。

山本 将也

経済学科2年
函館中部高校出身



地熱発電所と農業との連携

東日本大震災により福島原発は多大な影響を受け、日本はエネルギーの需給構造の大きな転換点にある。ベースロード電源として原子力発電所に依存することの危険性が明らかになり、このリスク回避の点から分散型エネルギーである再生可能エネルギーが着目されてきたのである。実際各地域でどのように再エネが普及・定着しているのかを今回の研修で学んできた。

特に、森地熱発電所が地域の主要産業である農業との関係が強いことがわかった。ここでは発電の過程で余剰となった地熱水を、「熱交換器」を使い各ハウスに供給しハウス内暖房として利用している。農家にとっては灯油を使うよりもコストが低く済む。これによりトマト農家は端境期に東京ディズニーランドやUSJも含む大規模市場へ出荷を行っている。

机上の学びではわからない地域の生の声を聞いたことは貴重な経験となった。



浅妻裕ゼミⅡ 2部浅妻裕ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 27名 (1部 13名・2部 14名)



浅妻 裕

経済学科
教授



伊達市「道の駅」前にて

地域経済・産業の静脈部に関する研修

研修地：伊達市・室蘭市

●研修目的

西胆振地域において、廃棄物処理・リサイクルの現状と課題、行政や民間でそれに対してどのような取り組みを行っているのかを学ぶ。またこれらの事項と、地域経済・産業がどのように関連しているのかを学ぶ。

研修先・日程

- 9月11日 伊達市建設部下水道課
伊達市たい肥センター
- 9月12日 JESCO 北海道 PCB 処理事業所
西いぶり広域連合（廃棄物処理・リサイクル）
あいもり株式会社
- 9月13日 移動日

写真① 伊達市終末処理場にて処理プロセスを学習。
② 伊達市たい肥センターで説明を受ける。③ たい肥を前に熱心にメモを取る。④ 伊達産完熟堆肥。⑤ JESCO 北海道 PCB 処理事業所に説明を受ける。
⑥ PCB 処理プロセス図の前にて。⑦ あいもり株式会社にて説明を受ける。



●総括

市民生活を含む地域の経済活動は様々な廃棄物を生み出している。現在は、トン当たりの処理費用の上昇や関係施設の老朽化、有機廃棄物処理問題などの課題がある。これに対して、伊達市では有機廃棄物の分別収集と堆肥化を行っている。この事業の目的は①廃棄物発生量の減少、②焼却処理の効率化（水分含有量の減少）、③堆肥の生産、である。このプロセスは農業が中心産業の一つであることから可能となっている。なお、下水汚泥も堆肥としてリサイクルされうが、セメント工場が近接していることもあり多くがセメントとなる。一方、焼却処理や最終処分は負担金を拠出し「西いぶり広域連合」が実施する。焼却施設は近い将来更新期を迎え、また参加を見合わせる自治体もあることから今後の財政負担が課題となっている。リサイクルは資源生産性を向上させるが、再生資源市場が発展していなければリサイクルに多額のコストをかけることになる。伊達市のあいもり株式会社では、噴火湾やオホーツク海沿岸に山積みされたホタテ貝殻（地域漁業から発生する）を有効利用できないかと考え、これをリサイクルして壁材に利用している。市場はまだ成長途上であるが、今後の可能性を感じ取ることができた。

学生研修記

佐藤 百合子

経済学科3年
札幌東高校出身



廃棄物処理に関する地域特性

私たちのゼミでは、廃棄物の処理やリサイクルについて学習しています。今回は地域経済や産業の静脈部分に関連する施設を訪問しました。あいもりというホタテの貝殻から壁材を製造する企業や堆肥センターでは、何もしなければ廃棄物として処理されてしまうものに付加価値を付けて市場に流すというプロセスに触れることができ、動脈産業と静脈産業の繋がりを見ることができたことに加え、廃棄物の再利用には地域特性を活かすことができるとわかりました。また、廃棄物にとって広範囲に分散したものを如何に効率的に集めるかが課題になります。西いぶり広域連合では廃棄物の広域処理を行っており、「範囲・効率化」という視点から学習できました。この研修を元に、私たちのゼミでは有機廃棄物に焦点を当て、その資源性を最大限に活かすにはどうすべきかを家庭系と事業系に分けて研究を進めています。

勝見 康太郎

2部経済学科2年
札幌真栄高校出身



静脈部における「費用」への着目

今回の研修では PCB リサイクルと下水の週末処理（汚泥リサイクル）が特に印象に残りました。伊達終末処理場では下水処理の工程や下水道インフラの現状、汚泥リサイクルの歴史について説明を受けたあと、下水処理場に入りその工程を見学しました。最終的に発生するのが下水汚泥で近隣の工場でセメントにリサイクルされており、最終処分場を節約しているといえます。PCB リサイクルを行う JESCO では PCB がそもそもどのような物質なのか、何故適正処理しなければならないのかを学びました。下水汚泥も PCB も、環境汚染と直結するもので、費用をかけて適正処理・リサイクルすることの必要性が理解できました。同時に、特に PCB について、かつてはこのような費用の発生を前提として PCB の生産が行われていたわけではなかったということにも深い関心を持ちました。



内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 7 名（うち聴講生 1 名）



内田 和浩

地域経済学科
教授



宿泊先の前で

留萌市のまちづくりに対する地域住民意識

研修地：留萌市

●研修目的

本地域研修 I・II では、前期のゼミナール I・II で学んだ量的調査法を用いて、留萌市のまちづくりに対する地域住民の意識調査を行い分析することを目的とした。

研修先・日程

- 8月7日 事前学習（大学にて）—アンケート調査票の確認と印刷。地域研修全体の打ち合わせ
- 8月8日 アンケート調査①（三省堂書店・市立図書館）
留萌市役所の皆さんと夕食兼交流会
- 8月9日 アンケート調査②（三省堂書店・市立図書館）
アンケート調査③（三省堂書店・市立図書館）
三省堂書店を応援し隊メンバーと夕食兼懇親会
- 8月10日 ミーティング（市立図書館内）
フィールドワーク（留萌市内）

●総括

前期のゼミでは、「量的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践を紹介し合った。そして、昨年に引き続き訪問先を留萌市とし、「三省堂書店を応援し隊」に対する住民の認知度やまちづくりの課題について、量的調査（アンケート調査）を行うための準備学習を行った。

地域研修では、初日から市立留萌図書館及び留萌ブックセンター by 三省堂書店で利用住民へのアンケート調査を実施した。夜には、留萌市役所の本学卒業生の職員の皆さんと懇談し、市職員の仕事やまちづくりの課題についてお話を伺った。2日目も終日アンケート調査を行い、200を超えるサンプルを回収することができた。最初はなかなか声をかけることが出来ずにいた学生も、だんだんと積極的に声をかけ趣旨を説明して了解を得ることが出来るようになっていった。そこでは生の地域課題についての意見も聞くこともでき、良き経験になったと思う。夜は、「三省堂書店を応援し隊」のメンバーと懇親会も行い、この1年の新たな動きも聞くことができた。

後期のゼミでは、アンケート票の集計・分析を行い、見えて来た課題に対して留萌市への提案をまとめた。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

菅野 亮太

地域経済学科 2年
苫小牧南高校出身



高橋 大騎

地域経済学科 3年
苫小牧南高校出身



地域研修を終えて

私たちのゼミでは、去年の質的調査を踏まえ、「三省堂書店を応援し隊」と留萌市のまちづくりに関するアンケートを作成し、三省堂留萌店と市立留萌図書館の二ヶ所でアンケート調査を行いました。

実際に自分たちでアンケートを作り、それを実施するという貴重な体験をすることができたと思います。行ったアンケートでは214のサンプルを回収し、クロス集計などを用いて三省堂書店を利用している人の傾向を明らかにして応援し隊とまちづくりの課題を考えました。

留萌市では若者の三省堂書店の知名度が低いことや、施設が分散しているため、コンパクトシティ化や交通手段の充実などを検討する必要があるという課題が浮かびました。

この地域研修で、アンケートを通して留萌市民の考えなどを直接聞くことができ、大変有意義な研修になりました。

地域研修を終えて

私たちは、昨年に引き続き2泊3日で留萌市へ訪問し、アンケート調査を行いました。昨年は、三省堂書店誘致に関わった3人のリーダー層に聞き取り調査を行い、まちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。今回の研修では、三省堂書店応援し隊について、本・本屋・図書館について、留萌市の町づくりについてという3本の柱を立てアンケートを作成した。アンケートは、三省堂書店留萌店を利用した事のある人を対象とし、三省堂書店留萌店と留萌市立図書館の2か所に分かれて自分達で利用者に声をかけ、アンケートに協力してもらいました。アンケート作成、自分達で声をかけ協力してもらい、集計し分析する所まで行うのは初めてだったので戸惑う事は多かったですが、市民にとって三省堂書店留萌店はどのような存在なのか、留萌市のまちづくりについて貴重な意見を聞く事ができたので今後の分析に生かしていきたいです。

写真① 留萌ブックセンター by 三省堂書店見学。
②③ 市立留萌図書館での調査。④ ブックセンター留萌での調査。⑤ 留萌市役所の皆さんとの懇親会。
⑥「三省堂を応援し隊」の皆さんとの懇親会。⑦ フィールドでの一コマ



大貝健二ゼミ

参加学生数 11 名



大貝 健二
地域経済学科
准教授



べつかい乳業興社にて

別海町の基幹産業の現状と課題を学ぶ

研修地：別海町

●研修目的

本研修では、「地域経済の活性化とは何か」というテーマを掲げた。この大きなテーマの下で、農業（酪農）、水産業、観光業の3つのグループに分かれて、①持続可能な酪農の実践、②水産業の現状や課題、③観光を軸に据えた活性化のあり方を考えていくことにした。

研修先・日程

- 8月29日 尾岱沼：野付半島クルージング
北海道中小企業家同友会別海地区会との交流会
- 8月30日 別海町役場
臼井牧場（酪農）、丸伊佐藤海産（水産業）、別海町観光協会（観光）
アークスファーム（酪農）、大森漁業部（水産業）、別海町観光開発公社
- 9月1日 べつかい乳業興社
別海バイオガスプラント（酪農）、野付漁協（水産業）、ジャンボ双葉（観光）
中春別農協（酪農）、別海漁協（水産業）、史跡散策（観光）
- 9月2日 別海町役場にて、中間報告会

写真① 丸伊佐藤海産。② 生後間もない牛。③ 乳業興社。④ 別海バイオガスプラント。⑤ ポークチャップ。⑥ 野付漁協。



●総括

本研修で明らかになったのは次の諸点である。第1に、酪農に関しては、政策的にも大規模展開が進められてきた当該地域ではあるが、経営者によって経営形態が異なることがわかった。また、別海町では酪農の糞尿処理を巡って課題を抱えてきた。現在では、バイオガスプラントを設立し、わずかではあるが、糞尿を適切に処理し環境への負荷を軽減する取り組みが行われてきていることがわかった。

第2に、水産業では、サケとホタテを中心に展開されているが、近年はサケの水揚げ量が激減していることが大きな問題となっている。水産加工においてはホタテ貝柱の輸出を展開している企業では、HACCPを取得し積極的に展開していることや、加工に関しては、外国人技能実習生の人たちが一定の役割を担っていることも確認できた。

第3に、観光に関しては、観光入り込み客数の動向からは、夏に観光客が集中し、さらにいわゆる「通過型観光」が中心であることが確認できた。そのような現状において、観光協会を中心に、冬場でしか見られない自然をピックアップした新しいスタイルの観光提案などが積極的に行われているがこともわかった。

学生研修記

和田 士
地域経済学科 3年
滝川西高校出身



別海町での観光を通じた活性化の可能性

私は、今回の地域研修では観光班になりました。この研修を通じて、中間報告のプレゼンを行う際に、別海町観光が抱える課題の解決についてとても悩まされました。別海町は観光資源がとても豊富な地域なのになぜ観光客にあまり注目されないのか？季節ごとの観光客数の偏りを無くしたらどうしたらよいのか？これまで個人的に、様々な視点で地域の活性化について考えてきたことがありましたが、そのどの事例にも似ていない独特な課題を抱えていたように思えます。課題に対して解決できたとは思いませんが、私たちの研修が解決に向けた1歩になれば幸いです。別海町観光の在り方について、実際に見て・食べて・感じて・深く考えさせられた、このこと自体がとても貴重な経験であると感じています。今後はこの経験を活かし、別海町をはじめとする北海道地域の発展に貢献していきます。

品川 未早
地域経済学科 2年
北海高校出身



「漁業と酪農の町」別海町を訪問して

私たちは、8月29日から3泊4日で別海町へ地域研修に行きました。研修では、観光・酪農・漁業の1班につき4人の3つの班に分かれてヒアリング調査を行いました。

私の所属は、観光班で、別海町での観光による地域振興の可能性についてヒアリング調査を行いました。別海町観光協会、別海町観光開発公社、ジャンボ双葉に訪問しました。

観光協会では、別海町観光の現状や問題点について、観光開発公社では、ネイチャーセンターの取り組みや野付半島の魅力についてのお話を、ジャンボ双葉では、ご当地グルメ成り立ちの経緯についてのお話をうかがいました。

今回私が感じたことは、別海町には他の地域にはない別海町ならではの魅力が沢山ある町だと感じました。その魅力を生かしつつ、別海町の抱える問題の解決方法を探ることが今後の課題です。



大貝健二ゼミ II

参加学生数 7 名



大貝 健二

地域経済学科
准教授



(株) 四万十ドラマ睦地社長とともに

高知の田舎はなぜ元気なのか?を真正面から考える

研修地：高知県高知市・土佐市・四万十町・黒潮町

●研修目的

本研修のテーマは、「高知の田舎はなぜ元気なのか」である。高知県は、課題先進地として取り上げられることが多いが、中山間地域など条件不利を逆手に取り、活性化にむけた精力的な取り組みが展開されている。そのような取り組み実態を学びに高知へ向かった。

研修先・日程

- 9月11日 移動
龍河洞散策
- 9月12日 特定非営利活動法人土佐山アカデミー（高知市土佐山）
企業組合宇佐もん工房（土佐市宇佐）
- 9月13日 (株)四万十ドラマ（四万十町）
(株)十和おかみさん市（四万十町）
(一社)いなかパイプ（四万十町）
- 9月14日 四万十川ラフティング
砂浜美術館（黒潮町）

●総括

本研修で明らかになった点は以下の通りである。第1に、地域資源を存分に活用していることである。これには、宇佐もん工房や四万十ドラマのように、地域資源を活用した商品開発の展開にとどまらない。土佐山アカデミーや砂浜美術館のように、ありのままの景観を魅力として活用している。第2に、都市と農村の交流である。地域づくりの展開において、地域住民だけではなく都市住民とのコミュニケーションを通じて農村の魅力の再発見へとつながっている。これは土佐山アカデミーによる交流イベントや、否かパイプの長期的インターンシップなどが該当する。第3に、「小さな経済」の創出である。いなかの活性化には、四万十ドラマやおかみさん市などの取り組みが示すように、既存の経済に追加所得を発生させる、「小さな経済」を組み合わせることで十分に可能であることが確認できた。第4に、これらの実践は、一朝一夕でできるものではない、ということである。今でこそ四万十ドラマは全国的に知られるアクターになっているが、ここに至るまでには20年以上の時間を要している。高知で学んだ実践を、どのように北海道で活かすのが教員、学生ともに今後の課題である。

学生研修記

岩松 聖人

地域経済学科 3年
石狩南高校出身



斉藤 伶王

地域経済学科 3年
江別高校出身



日本最後の清流のある高知県を訪れて

私たちは、9月11日～15日の日程で、高知県へ研修に行きました。「高知の田舎はなぜ元気なのか？」をテーマに、地域資源・移住・人という3点から高知県での地域活性化を考えました。

高知滞在中の4日間はヒアリングが続きましたが、訪問した各所で行っていることは実に多様でした。しかし、現地の人たちが楽しみながら活性化に向けた活動をおこなっている点は共通していると感じました。当事者が楽しんでいるからこそ柔軟な発想ができ、面白い取り組みを次々に可能にしているという点はとても興味深かったです。

今回の研修で訪れた地域は、足元にあるもの、身近にあるものを活かすことで地域の活性化につながっていました。今後は、今回の研修で地域活性化に向けて得られた知識をもう少し大きな地域でも活かすことができるか、考えていくことが課題です。

高知県の地域活性化の取り組みを聞いて

大貝ゼミIIは、9月11日から15日の5日間で高知県に行ってきました。高知県の中でも、高知市・土佐市・黒潮町・四万十町の4か所に向き、各地で高知県の地域活性化の取り組みはどのように行われているのかをヒアリング調査を行いました。どの場所でも“地域を活性化させたい”という思いを持った人が当事者意識を持ち、行政や同じ思いを持った人々のコミュニティをうまく利用しながら人と人をつないでいる印象を強く受けました。誰もが自分の住む地域に活力があって経済が循環していることを望むが、では実際に誰が先陣を切って具体的に何をするのか、明確になっていないことが多いのではないのでしょうか。高知ではそれが実現されており、実際に形となって結果に出ています。一人一人の人間像が濃く、とても貴重なお話を伺うことができたので、得た知識を無駄にせず活用していきたいです。

写真① 四万十川。② 土佐山アカデミー。③ 宇佐もん工房。④ 四万十ドラマの製品。⑤ 四万十ドラマ。⑥ 四万十川ラフティング。



川村雅則ゼミⅡ

参加学生数 15 名



川村 雅則

経済学科
教授



法政大学ゼミとの討論大会を終えて

学生アルバイトをめぐる問題 労働組合、労使関係

研修地：札幌市

●研修目的

○今年度も、学生アルバイトをめぐる問題を明らかにした。各種の調査活動に取り組み、『学生アルバイト白書』をまとめた。今年度は、聞き取り調査やアンケート調査のほか、雇用契約書や就業規則を読み込む「資料調査」も行った。

○労働契約は労使の合意の下で締結・変更されるものであり、労働条件の決定は労使が対等の立場で行うものである（労働契約法、労働基準法）。それを可能にするものが労働組合である。労働組合の体験からそのことを学び、『学校で労働法・労働組合を学ぶ 2017』（写真）にまとめた。

研修先・日程

前期	若者の雇用や労働法に関する学習。 学生アルバイトの聞き取り調査を実施。 3年生は、日本学生経済ゼミナール大会（以下、インゼミ大会）への参加準備を開始。研究テーマは非正規雇用問題に設定。
夏季休業 期間	札幌地域労組の事務所を訪問して、労使関係・労働組合について学ぶ（8月7日）。 『学生アルバイト白書 2017』のとりまとめ作業を開始。聞き取り調査の結果と、雇用契約書や就業規則などを読み込む「資料調査」の結果をとりまとめる。
後期	北海学園学生を対象としたアンケート調査を実施（10月）。調査結果をとりまとめる。 3年生は、12月9・10日に近畿大学で開催されたインゼミ大会に出場。 大学生のアルバイト問題を考えるシンポジウムを本学にて開催（2018年1月）。

写真 札幌地域労組での学習会（①講師は札幌地域労組副委員長の鈴木ーさん ②パワーポイントを使った具体的な事例報告）



●総括

例年通り、学生アルバイトに関する調査活動と『学生アルバイト白書』づくりを行った。

調査活動は、例年行っている聞き取り調査とアンケート調査（有効回答 493 人）に加えて、雇用契約書や就業規則の読み込み（「資料調査」）を行った。

アンケートによれば、アルバイトをしている学生の割合は、「現在」している学生だけで8割（2部生に限ると9割）を占める。そのうち15時間、つまり、年間で40単位を取得するために出席が必要な、1週間の講義時間数以上に働いている学生が6割に達する（図1）。

長時間に及ぶこうしたアルバイトの目的で多くあげられているのは、趣味娯楽等に使うお金を稼ぐためであるものの、一方で、生活費や学費等を稼ぐために働くというものも、2部生を中心に少なくない（図2）。アルバイトや奨学金による収入がなければ学業の継続が困難になるという回答も、1部生で24.2%、2部生では38.2%に及んだ。

また今回の調査では、アルバイトによる学業面への支障の有無を細かく尋ねたが、定期試験前・期間でも休みがとれなかったり、学習時間の確保が困難だという回答が一定数みられた（図3）。アルバイト先での労働力不足・コストの切り詰めが背景にあると思われる。資料調査でも、（使用者側からみて）柔軟な働き方を可能にする内容で契約が結ばれている事例——例えば「必要に応じて時間外労働、休日労働、深夜労働を命じる場合がある」「実際のシフトは各店舗の繁閑状況を加味して

学生研修記

学生がアルバイトをする理由



館内 静加

経済学科 2年
室蘭清水丘高校出身

私たちのゼミでは、学生アルバイトに関する調査・研究を行い、学生が経験しているトラブル・問題やその解決策について学んでいます。

8月には札幌地域労組を訪問し、労働組合の取り組みについて学びました。その後、北海学園大学に通う学生を対象に、アルバイトの実態やアルバイトが学生生活に与える影響、学生が置かれている経済状況などについて調査をし、アルバイト白書を作成しました。

最近の学生はアルバイトばかりして学校に行っていないといった指摘もあります。実際、授業と同じくらいの時間や、それ以上をアルバイトに費やしている学生もいることが判明しました。

しかし、趣味や娯楽のためだけではなく、学費や生活費のためにアルバイトをしている学生が多いというのが現状です。大学での学習により集中するためにも、私たち自らが学生の置かれている状況を理解し、世間に訴えかけることも大切だと思いました。

働く上での心構え



天水 眞代

経済学科 2年
札幌東高校出身

私たち川村ゼミは夏に札幌地域労組を訪れ、長年、労働相談や組合づくりなどの活動をされている鈴木ーさんにお話を聞いてきました。

労働問題について鈴木さんは、今までに関わった労働相談事例を使いながら、具体的に教えてくれました。例えば、いきなり解雇・リストラなど会社都合で辞めさせられるほか、雇い主側の都合にもかかわらず無理やり自己都合退社という形で辞めさせられてしまうことがあるそうです。後者の場合、退職金が減額されたり雇用保険の給付がすぐに受けられないなどの多くの不利益をこうむります。

大切なのは、労働者の側も知識を持つことと、給与明細などの資料は保管しておくこと、また、パワハラ・セクハラや不払い労働などの不当な扱いを受けている場合には、会社を辞める前にそのやりとりを記録したり労働時間なども記録しておくことだと教わりました。それだけで、雇い主側に賠償を求めるなどして多くの労働者が守られるのだそうです。

これらはアルバイトをしている学生にも身近なことであって、広く知られるようになってほしいです。

図1 15時間以上働く学生が全体の6割超——1週間の勤務時間

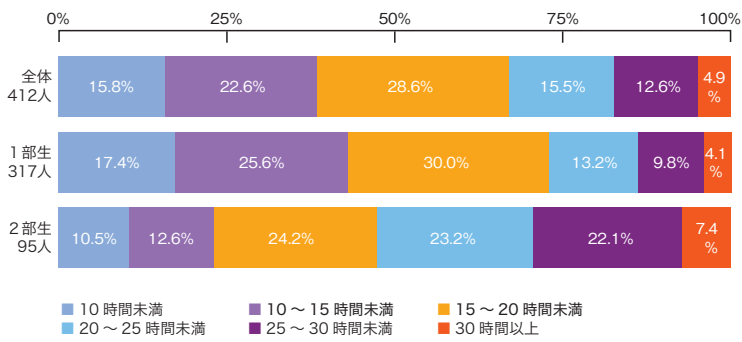
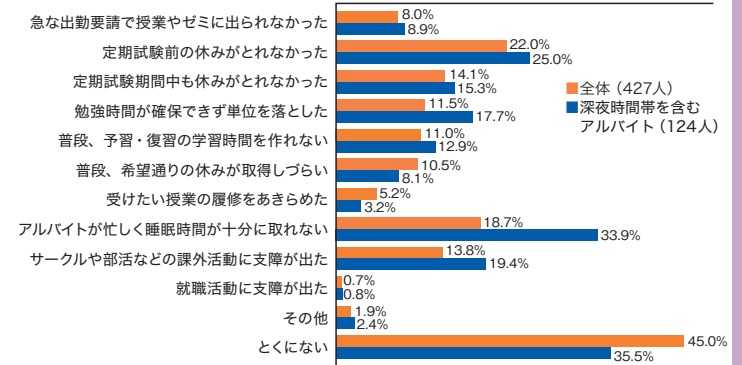


図3 試験前・期間でも休みがとれない、学習時間の確保が難しい——アルバイトによる学業への影響 (複数回答可)



決定する」「〔勤務場所〕上記所屬店舗及び当社近隣各店舗」など——が明らかになった（以上の詳細は、『学生アルバイト白書 2017』を参照されたい）。

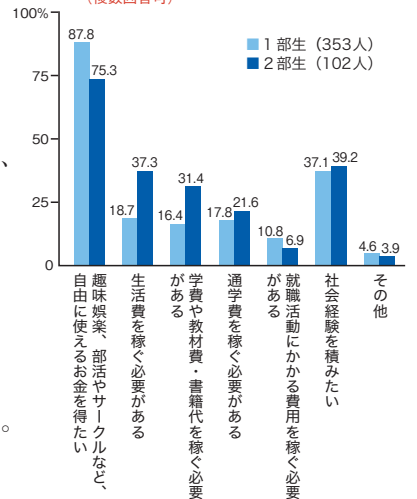
→ <http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可

問題の解決策として、ワークルールを学ぶことはもちろんだが、労働条件は労使が対等の立場で決めるものであり、使用者が一方的に決めるものではない、という自覚が必要である。そこで今年度も、札幌地域労組を訪問し、労使関係・労働組合の重要性について、具体的な相談事例や取り組みにもとづきながら学んだ（講師は副委員長の鈴木一氏）。

多岐にわたった当日のお話のうち、今回は、社会福祉法人で結成された労働組合が、施設経営・運営の正常化や労働条件の改善を実現するまでの過程を取り上げ、『学校で労働法・労働組合を学ぶ 2017』（写真）にまとめた。団体交渉の場面や労働協約などの資料も盛り込まれた、労働組合を学ぶ上での良質の「教材」になったと思う。

なお、3年生は、インゼミ大会に参加するため、非正規雇用問題をテーマに研究活動を進めてきた。当初予定していた、自治体の臨時・非常勤職員（非正規公務員）に関する聞き取り調査・資料収集こそ、先方の都合で実現できなかったものの、文献研究を中心に論文をまとめあげた（タイトルは「日本の非正規雇用問題——雇止め防止と処遇改善に向けて」）ことを付記しておく。

図2 2部生を中心に生活費や学費等を稼ぐために働く学生が少なくない——アルバイトの主な目的 (複数回答可)



写真③ アンケート調査結果から何が言えるか。④ 締め切りが迫ります。⑤ 3年生は近畿大学で開催されたインゼミ討論大会に参加。⑥ 講義で2年生がアンケート調査結果を発表、質疑も行う。

学生研修記



志村 宥哉
経済学科3年
北海道出身

労働組合について学んでいく中で

現在社会問題になっている過労死や長時間労働などに対して、労働組合はどういった役割を担うことができるのか。また実際、組合活動は職場にどのような効果をもたらしているのかなど、「労働組合」に関心を持つに至りました。

そこで、事前学習を経た上で、札幌地域労組を夏季休業中に訪問し、社会福祉法人における労働組合の取り組みや、管理職で結成された管理職ユニオンの取り組みなどについてお話を聞きました。労働組合には労働者の働く環境を守り、改善していく力があることが分かった反面、職場で問題が生じても解決や改善に取り組むことのない、形式だけの労働組合、いわゆる「御用組合」という存在を教わりました。

今回の地域研修を通じて、労働者同士が団結し、同じ志を持って、職場の問題解決に向けて粘り強く取り組んでいくことが大事だと分かりました。

労働組合を具体的に学ぶ

今回私たちは、夏季休業期間中に札幌地域労組という労働組合を訪問し、副委員長である鈴木一さんからお話を伺いました。

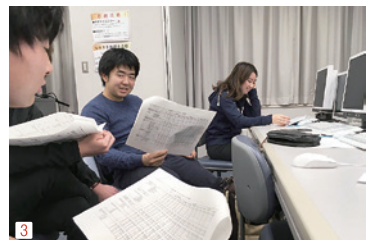
労働組合という言葉は知っていてもどのような役割を果たしているのかなどを知らない人がほとんどだと思います。私たちも、労働三権の一つである団体交渉というのも、その結果として結ばれる労働協約についても、言葉でしか聞いたことがありません。そういう資料や場面を、具体的に見せていただきながらお話を聞きました。

労働組合が職場に与える影響力は大きいです。実際に札幌地域労組は多くの職場で労働問題を解決しています。また、地域の労働組合には私たちのような学生でも加入することができます。そして労働組合は、一から自分たちで結成することもできます。

みなさん、アルバイトをしていて労働条件で悩みや不満があったりしませんか？ そのようなときはぜひ労働組合に相談してみてください。



中村 優太
経済学科3年
北海道出身



徐涛ゼミⅡ 2部徐涛ゼミ

参加学生数12名



徐 涛

地域経済学科
教授



旭山動物園で

外国人観光客誘致の実態調査：市民意識調査

研修地：旭川市

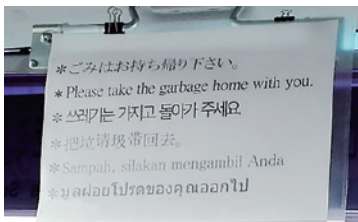
●研修目的

昨年の来日外国人は2400万人に達し、日本経済を支える力になった。しかし、同時に交通、宿泊などキャパシティの面において、課題が顕著になりつつある。今年は旭川市・旭山動物園にて日本人の視点から外国人観光客誘致（インバウンド誘致）の現状と課題を調べた。

研修先・日程

- 10月8日 旭山動物園にて、広報担当の加藤明久さんより旭山動物園の外国人観光客誘致の事業紹介・質疑応答
旭山動物園にて、日本人来園客に対するアンケート調査
- 10月9日 旭川市役所観光課岡田裕樹さんより旭川市の外国人観光客誘致の事業紹介・質疑応答
旭川市商店街買物公園にて、日本人に対するアンケート調査

写真① チャーターバスの通じない中国語翻訳。
② 旭山動物園のインバウンド紹介。③ 旭山動物園調査。④ 旭川市インバウンド紹介。⑤⑥ 旭川市調査。



●総括

昨年は旭山動物園にて外国人来園客を相手にアンケート調査を実施した。今年は、インバウンド誘致のもう1つの側面、地域住民の切口からインバウンド政策を考察した。

211の有効サンプルをみると、8割超を道内の方が占めており、約半数は外国人とほとんど接する機会がなく、海外に行ったこともない。また、約8割はインバウンドの人数や言葉の意味についての知識が乏しい。

サンプルを調べた結果、次のことが明らかになった。

(1) 全体的にみると、インフラ、それに政府のインバウンド政策について、概ねプラスに評価している。しかし、約8割の方が総論的に「メリット」のほうが大きいと答えたのに対して、「地域が恩恵を得ている」と感じた人は6割を下回った。また、外国人に対して友好な姿勢を示したが、近所に民泊施設が設置されることに反対する人もかなり多い。

(2) 属性別にみると、違ったインバウンド意識の側面も現れている。

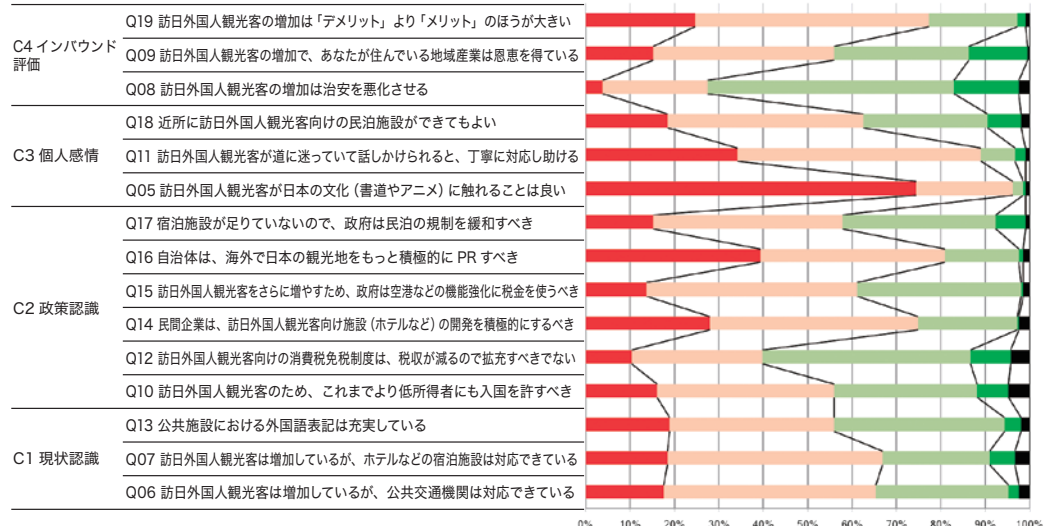
- ①公共交通機関、宿泊施設、外国語表記について、インバウンドの知識を有する方、海外経験者、公務員、専業主婦、会社員などからは、設問にもよりますが、多くの方は「充実している」と思っていない。
- ②低所得者の入国について、インバウンドの知識を有する方、公務員、専業主婦、会社員、道外の方、20代以上の方は、かなり反対している。
- ③空港建設などに税金を投入することには、半分の公務員と専業主婦が反対している。
- ④民泊の規制緩和について、公務員と中年層の大半が反対している。
- ⑤近所での民泊施設には、インバウンドの知識を有する方、公務員と中年層の大半が反対している。

まとめてみると、インバウンドの知識を有する方、海外経験者、公務員、中年層など、いわゆるインバウンドについて「知見」を有する人のほうは、インバウンドのインフラについて、懸念を抱いている人が多い。専業主婦においても、このような傾向が見られる。これらの方の多くは、低所得者の入国、インフラ整備への税金投入、民泊緩和、近所での民泊営業について、一部反対している。

インバウンドは日本にとって「メリット」であっても、地域が恩恵を得ていないとの判断がその裏にある。如何に地域にインバウンドの「恩恵」を還元するかは、喫緊の課題である。

最後に、学生の感想文からもわかるように、本調査は、学生たちがグローバルな視点をもって、どうすれば北海道の経済社会がもっと良くなるのかを深く考え、そして汗を流して地域密着的に実学を学ぶ良い機会になった。ご協力くださった旭川市の方々に感謝を申し上げます。

インバウンド意識 ■ ともそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ まったく思わない ■ 無効



佐藤信ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数25名



佐藤 信
地域経済学科
教授



中山峠にて

ニセコ町におけるまちづくり

研修地：ニセコ町・倶知安町

●研修目的

本研修は、近年人口が増加しているニセコ町を対象とし、人口増加の背景となっているまちづくりの特徴—観光対策や定住政策—を知るとともに、ニセコ町内の視察を通して、地域資源を活かした地域づくりの今後を展望することを目的とした。

研修先・日程

- 8月30日 ニセコビュープラザ、有島記念館、綺羅街道、ひらふ坂
- 8月31日 ニセコ町役場、後志総合振興局

写真① 建設ラッシュのひらふ坂。② ニセコ町の国際交流員の人たち。③ 倶知安町の信金は外貨両替ができる。④ 後志総合振興局にてヒアリング。



●総括

ニセコ町は人口5千人弱（2015年国勢調査）の小さなまちであるが、近年リゾート開発や観光地として知られ、北海道では数少ない人口増加自治体となっている。ゼミでは、ニセコ町のまちづくりの取り組み内容を知るとともに、倶知安・ニセコエリア全体の地域概況を把握するために現地視察や後志総合振興局でのヒアリングも行った。

視察先の一つである「ひらふ坂」（倶知安町）は、ニセコアンヌプリの麓にあるが、ホテルの建設ラッシュが進んでいるとともに、海外の街並みのような景観となっていた。ニセコ町においても、通訳を始め、外国人住民の支援や交流イベント、会話教室などを手がける国際交流員を4名採用するなどの対策を講じている。他方、外国人観光客が冬に集中する傾向があることから、労働力不足の改善、安定雇用対策も課題となっていた。こうした状況におかれながらも、ニセコ町のまちづくりの基本は、まちづくり基本条例にあることも職員との意見交換で確認した。

今回の地域研修では、過疎・高齢化といった北海道内各自治体のイメージとは大きく異なったニセコエリアを訪問し、人口増の背景にある、地域資源を「ブランド」として活かす事例を知ることができ良い経験となった。



ニセコ町の国際交流員との意見交換

学 生 研 修 記

渡辺 妃奈乃
地域経済学科2年
札幌開成高校出身



石田 一将
地域経済学科3年
石狩南高校出身



外国人から見たニセコ町の魅力

私はニセコ町を訪れて、改めて外国人の多さに驚かされました。ニセコ町では観光客としては勿論、外国人登録者としてもここ10年で10倍になるほど人数が増加しています。ニセコ町ではそんな外国の方とも交流するために、国際交流員がいます。今回その方々からお話を伺える機会がありましたが、私が一番印象に残っているのはニセコ町では外国の方が多く国際結婚も多いので差別が少ないということ、ニセコ町の外国人と日本人との意思疎通に国際交流員が大きく役立っているということです。また彼らはもっと町民と交流したい、自分のスキルを活かしたいと考えていました。私はこれらが外国人から見たニセコ町の魅力であり利点であると考え、外国人の数が増えていく理由だと思います。今回、ニセコを通して、どのように地域に人を呼び活性化させるか、また人口を増やしていくかを学びました。これからは、ニセコ町以外の地域ではどう対応していくべきなのか等、勉強の幅を広げていきたいです。

ニセコエリアの研修を終えて

ゼミの研修で真っ先に感じたことは、この地域は北海道の中でも特異な状況下にあるということだ。町を歩いていると看板や案内板は日本語と外国語の併記が当然となっている。中心部から離れた農業地域に突如としてホテルやコンドミニアムが現れ、建設中といった光景も広がる。後志総合振興局で伺った話によると、倶知安の駅前通りでは近年テナントが多く埋まり、「シャッター通り」現象とは無縁だという。郊外の大型店舗によって中心部が衰退するなどの最近の経済の動向と照らし合わせても、ニセコエリアは活気にあふれていると思った。他方、観光消費が町の歳入となるウエイトは大きくはなく、そのような仕組みも整っていないことが懸念として挙げられる。現地を視察すると、想像していた以上に外国資本による宿泊施設の建設が進んでおり、早急に対策を考えなければ町にとっても享受できるメリットが失われるように感じた。

中園桐代ゼミ1・11

参加学生数9名



中園 桐代

地域経済学科
教授



「ねっこぼっこのいえ」で

地域で求められる子どもの貧困対策を検討する

研修地：札幌市

●研修目的

子どもの貧困が注目されるようになって久しい。教育費の支援だけで対策は充分だろうか？ 貧困は「社会関係資本」（「信頼、つきあい、人間関係」など人と人の間に存在する資本）にも影響を与え、「社会関係資本」は進学や就職に影響すると言われている。その課題を地域のNPO団体がどのように解消しようとしているのかを検討する。

研修先・日程

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 10月2日 | NPO団体「ねっこぼっこのいえ」代表
小林真弓さんの講演 |
| 10月6日 | ねっこぼっこのいえ見学 |

●総括

貧困状態はしばしば孤立を伴い社会的排除が政策課題として認識され、その解決策として社会的包摂が議論されてきた。

学生と訪れたNPO団体「ねっこぼっこのいえ」は「多世代型」の地域子育て支援拠点として活動を行い、未就学児と母親だけでなく、老若男女が誰でも参加できる「ひろば」という活動を行っている。その中で生活保護家庭の不登校だった女子中学生が、学習支援などを受け高校に進学することができた。多くの人は、「かわいそうな女の子が援助を受けられてめでたし、めでたし」と思うだろう。しかし、彼女は「ひろば」で赤ちゃんの面倒を見るという「大役」を果たした。そこがすべての出発点である。援助されるのではなく、自分の能力を発揮する場を獲得する。そこから自分の行く先を見通す力が生まれる。本人が自立を求めなければ、学習支援を行っても高校に合格することはできないだろう。お仕着せの支援では自立はできないのだ。

そして「ひろば」に来ていた出産で仕事を辞めた元女性教員が勉強を教えた。皮肉なものである。安倍政権的に言えば「活躍していない」女性が彼女を支援したのである。

この研修を通じて、排除と包摂、単純な二項対立では捉えきれない活動が地域では必要とされていることを私自身も認識することができた。

学生研修記

高平 航希

地域経済学科 2年
札幌新陽高校出身



遠藤 雛子

地域経済学科 3年
北海学園札幌高校出身



ねっこぼっこのいえを研修して

中園ゼミは札幌市豊平区月寒にあるねっこぼっこのいえを訪れました。北海学園大学と同じ区内なので近いところにあります。ねっこぼっこのいえは2007年に設立され多世代交流場です。子供から年配の方まで様々な世代の人が交流できる場所となっています。

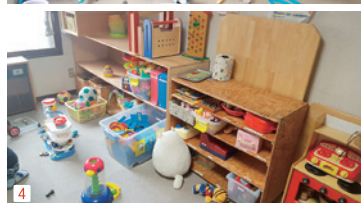
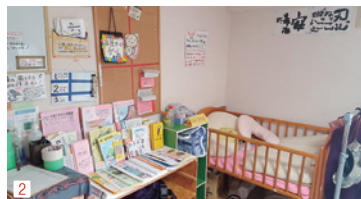
ねっこぼっこのいえを研修して、私たちは多くの人たちが楽しく話し合い遊んだりして「居場所」を共有し合っているという印象を受けました。研修したときは子供が多かったのですが、外で遊ぶ子供達、建物の中で遊ぶ子供達がいました。ねっこぼっこという一つの空間に複数の「居場所」が点在していました。

今回の研修を経て、多世代と交流を持つことが周りの人達とのつながりを保ち、孤立や頼る人のいない状態を解決する可能性を持っているはずだと考えました。

ねっこぼっこのいえへの地域研修を終えて

私たちは、「子どもの貧困に有効な多世代型交流」をテーマに札幌市月寒にある「ねっこぼっこのいえ」で地域研修を行いました。研修前にねっこぼっこのいえ代表の小林さんから概要や事例を聞き、地域研修当日はねっこぼっこのいえを利用している子どもたちと触れ合うという流れでした。子どもの貧困とは、金銭面で困窮している経済的貧困と社会や地域、家庭とのつながりが失われることによる関係面で困窮している関係的貧困の2種類があると私たちは考えました。これらの貧困は学校や家庭で出来ることは限られており、学校とは違う多世代の様々な人が訪れるねっこぼっこのいえは、貧困を抱える子供たちにとって居場所となり、同時に貧困を解決するための力になってくれる場であることを知りました。

地域研修を通して、ねっこぼっこのいえのような多世代型交流広場は子どもの貧困改善に大きな役割を担っていることが分かりました。しかし、多世代型交流だけでは解決できない金銭面の問題も今後の課題となることが分かり、貧困への理解が深まり、地域研修の重要性を感じることができました。



写真① 隣の「しのめ幼稚園」の園庭で外遊び（学生も!?）。
② ねっこぼっこのいえの入り口。③ お母さんと子どもが一緒に遊べます。④ おもちゃもたくさんあります。⑤ 「みんなのひろば」のおやつタイム。

西村宣彦ゼミ I・II

参加学生数 28 名



西村 宣彦

地域経済学科
教授

富士山静岡空港にて

東海道・掛川の経済・文化と「互産互生」の可能性

研修地：静岡県掛川市

●研修目的

北海道とは気候風土が大きく異なる静岡県掛川市の経済・産業と、その背後にある歴史・文化、地域づくりの思想（報徳思想、生涯学習）を学び、「異日常」に触れ、その魅力を感じながら、掛川発の新しい地域間交流の営み＝「互産互消（生）」の意義と可能性を探った。

研修先・日程

- 8月28日 東山茶畑（茶草場農法）見学、大塚製茶見学
大日本報徳社見学、榎村純一社長（元市長）講話
ナイトセミナー①さくら咲く学校（井村征司さん、佐藤忍さん）、②スローライフ（長谷川八重さん）、③互産互消（佐藤雄一さん、残間正之さん、山崎善久さん）
- 8月29日 遠州横須賀城～まち並み散策（ガイド：横須賀倶楽部 鈴木武史さん）
「晴れときどきカフェ」を拠点に横須賀商店街で戸別訪問ヒアリング
掛川市森林組合見学
宿舎（さくら咲く学校）で市民の皆さんと交流 BBQ
- 8月30日 掛川市役所ヒアリング（①松井三郎市長挨拶、②生涯学習のまちづくり、③地域経済・お茶振興、④行財政改革）
ヤマハ掛川工場（ピアノ工場）見学、資生堂企業資料館・アートハウス見学、「これっしか処」見学
宿舎で研修成果報告会の準備作業
研修成果報告会の準備作業（掛川市立図書館内会議室）
研修成果報告会
掛川城見学、煎茶道体験
キウイフルーツカントリー見学
- 8月31日

写真① 報徳思想の総本山・大日本報徳社の榎村純一社長（元掛川市長）の講話。② 東山地区の伝統的な茶草場農法の茶畑見学。③ 横須賀商店街ヒアリング。④ 掛川市立図書館にて研修成果報告会。⑤ 事後学習で大通ビッセ地下にて静岡茶販売実習。



●総括

学生の大半が初めて訪問した静岡県掛川市は、北海道と比べて製造業の集積が厚く、日本を代表するお茶の産地で、北海道と異なる農業景観が印象的である。また経済と道徳の両立を説く「報徳思想」や、「向都離村」を促す学校教育に対して、地域に誇りを持って生きることを後押しする「生涯学習」に一早く取り組むなど、豊かな思想風土が息づくまちである。「互産互消（生）」の概念もそうした風土の中で生まれた。自己閉塞的になりがちな「地産地消」とも、一見合理的であるが地方全体が消耗していく「東京志向」とも異なる。遊び心を持つ成熟した大人達が「ローカル to ローカルの交流と交歓」を通じて、「地方に生きる豊かさと楽しさ」を実践し、もう一つの生き方・社会のあり方を創造・発信する活動であり、大きな可能性とロマンを感じた。本研修は掛川を拠点とする「ローカルライフスタイル研究会」（佐藤雄一事務局長）の受け入れ・コーディネートにより実施し、富士山静岡空港利活用促進地域連携事業の助成を受けた。事前学習では小松正明氏（掛川市元副市長）、研修中は残間正之氏（フォトジャーナリスト）のサポートを受け、事後学習では原大介氏（ユアンワークス）らの協力を得て、静岡茶販売実習を大通りビッセ地下で行った。私達を快く受け入れて下さった掛川の皆様とともに、記して感謝したい。

学生研修記

酒井 麻那

地域経済学科 2 年
滝川西高校出身

哲学を持ち「楽しい」を形にするまちづくり

掛川では、自分の哲学を持って行動する人たちが数多く出会ったのが印象的でした。全国で初めて「生涯学習都市」を宣言し、我がまちを知ることで我がまちに誇りを持ち、我がまちのために行動する「人づくり」をまちづくりの基礎に据えた元掛川市長の榎村純一さん。「互産互消」（ローカル同士でヒト・モノ・コトの交流を行う）を掲げて、地方で暮らす楽しさや魅力を地方同士で伝え合い、分かち合う活動に取り組む佐藤雄一さん。遠州横須賀地区の鈴木武史さんは、集客の量よりも人とのつながりやリピーターを大切にし、何より住民自身が楽しいことをモットーに、祭りや町並み保存などの活動に取り組んでいました。こうした行政に頼らない活動や、量より質で評価する考え方は、多くの地方の手本になるもので、ヒト・モノ・コトの交流がもたらす刺激や楽しさには、大きな可能性があると感じました。

本郷 愛理沙

地域経済学科 3 年
大麻高校出身

「人のつながり」を大切に地方創生

4 日間過ごした静岡県掛川市は、気候も風土も経済も札幌とは全く違うものだった。しかし、地元愛が強く、どこかのんびりとした県民性は、道民に通じるものを感じた。研修を通して強く感じたものの一つに「ヒトの繋がり」がある。地方同士で特産品などをやりとりする「互産互消」でもヒトの繋がりが重視される。「互産互消」の魅力は、地域を越えた生産者や生活者の顔が見えるお付き合いである。この考え方がもっと地方に根付くと、地方創生の取り組みも変わっていくのではないかと。遠州横須賀商店街でのヒアリングでは、年一回のお祭りにかける情熱に触れ、地元愛の強さを感じるとともに、この地域の魅力に惹かれて訪ねてくるリピーターとのつながりを、とても大事にしているのを感じた。この地域研修をきっかけに、北海道と掛川市のつながりをもっと深めていきたいと思った。



濱田武士ゼミ

参加学生数 15 名



濱田 武士

地域経済学科
教授



網走市街地を背景に

人口減少社会と地域産業そして若年層

研修地：網走市

●研修目的

道内の多くの地域においては人口減少が進んでいる。人口減少をもたらす要因に、若年層の就業機会が少なく、都市部への流出が止まらないことがある。そのこともあって多くの地域では、地域産業の人手不足は深刻化しており、地域経済の構造不況が固定化されてしまっている。本研修では、東京農業大学がある網走市に訪問して、地域産業がどのように維持され、若年層とどのような関係が築かれているのか、実態を探り学ぶことにした。

研修先・日程

8月28日	網走市役所企画課
8月29日	JA オホーツク網走 オホーツク流水会館、網走刑務所博物館
	イチゴ農家・新規就農者
8月30日	網走市農林水産課 西網走漁協 網走市漁協
8月31日	(株)オホーツクマーケット 東京農業大学：学生からのヒアリング

写真① イチゴ栽培施設内。② 西網走漁協研修室。
③ オホーツクマーケット工场内。



●総括

網走市の総人口(2017年8月末)は36,200人、2000年以後、約15%が減少。他方、網走市内には1989年に東京農業大学(以下、農大)が立地し、常に1600人の若年層(学生)が確保されている。学生の約8割は道外出身者で、地元若者を呼び込む機関になっている。ただし卒業後、地元で定着するものはほとんどいない。地域産業は、観光業にも力が注がれているが、主力は農業、漁業である。農業は、(株)日本ハムによる大規模養豚経営の他、畑作、施設園芸、野菜作があり、畑作が主である。ビール原料、砂糖原料、澱粉原料として麦、てん菜、馬鈴薯などが生産されており、農家によって営まれているが、集団営農による大規模化が進んでいる。漁業は、オホーツク海で行われる海面漁業と、網走湖、能取湖、濤沸湖などの汽水湖で行われる内水面漁業とがあり、いずれも、サケ、ホタテガイが主要産品になっている。湖内はホタテガイの種生産が主。これら主要産品はすべて漁家の共同経営で行われている。網走の農業、漁業は、家族経営型であっても、高収益であり、多くの農家、漁家では跡継ぎが確保されている。市役所の就農支援などで新規就農者も存在するが、僅かである。とはいえ、農家、漁家の世帯員だけでなく地域社会が高齢化しており、繁忙期に人手を確保できなくなっている。それゆえ、農大生のアルバイトが欠かせないという。また、量産指向の強い農業・漁業地帯にあって、地元のブランド食材を売り込む事業(オホーツクマーケット)が起業されており、ここでも農大生が欠かせないという。地域から学生には生産・流通の現場で稼ぎながら農・漁を学べる場が提供されている。しかし、農大生への依存度が高く、夜間、早朝の仕事であるゆえに就学との調整が難しくなっており、現場には学生への配慮も必要となっている。亀裂が生じないような「地域ぐるみ」の対策が必要とされている。本地域研修では以上のことを学んだ。



オホーツク流水会館内

学生研修記

檜谷 祥貴

地域経済学科 2年
羽幌高校出身



地域研修を終えて

私たち濱田ゼミは網走市を訪問し、基盤産業である農業と漁業の現状や、東京農業大学の学生の生活実態について調査を行いました。市役所やJAオホーツクあばしり(オホーツク網走農業協同組合)の方々から貴重なお話を伺い、さらに、新規就農者や東京農大の学生へヒアリングを行うことができました。これを通して、網走市の農業と漁業は繁忙期になると人手が不足するといった問題があり、この現状を支えているのが農大生のアルバイトであることがわかりました。また、農大生へのヒアリングから、早朝や夜中からのアルバイトのため、その期間は学業との両立が大変であることもわかりました。実際に網走市に行って直接話を聞いてみないとわからないことが多く、有意義な地域研修だったと思います。

鈴木 花

地域経済学科 2年
札幌清田高校出身



網走市を訪れて

私たちは、道東の網走市で研修を行いました。現地では、新規就農したいちご農家の方々や漁協の方々に、地域産業の現状をはじめ、さまざまなお話を聞かせて頂きました。網走市では、共同経営化によって大規模な産業が行われていることがわかりました。また、繁忙期には東京農業大学の学生の協力が欠かせないということでした。実際に、農大生の皆さんともお話をすることが出来ましたが、早朝からホタテ漁のアルバイトに行ったあとに、学校に行くという多忙な日もあると聞き、率直に驚きました。それと同時に、同世代の方々がまちで大きな役割を担っていることは、本当にすごいことだと思いました。網走市は、人口減少しながらも、現在は担い手不足には悩まされていないということでしたが、その一方で、このまま農大生に依存してはいけないという将来的な不安も感じられました。

早尻正宏ゼミ

参加学生数 10 名



早尻 正宏

地域経済学科
准教授



宗谷本線・天塩中川駅で

多様な森林利用に基づく山村地域の再生実践

研修地：中川町

●研修目的

研修の目的は、地域固有の環境資源に根差した産業再建の実践例に触れ、過疎地再生の展望を探ることにある。訪問先は上川地方最北部に位置する中川町。「森林文化の再生」を掲げたユニークな産業づくりでいま全国から注目される道北地方の小さな山村である。

研修先・日程

- 8月21日 町役場で聞き取り
川口精雄町長：中川町の概要、まちづくりの基本姿勢
町産業振興課産業振興室（高橋直樹主任）：中川町の林業情勢、林業振興施策の概要と特徴
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター（吉田俊也教授）：中川町の森林資源の特徴、北大と町の連携
- 8月22日 町有林視察
町職員（高橋氏）から町有林の管理運営について聞き取り
町役場で聞き取り
地域おこし協力隊員6名と意見交換
牧場視察
- 8月23日 神奈川県から新規就農した酪農家（丸藤牧場）で聞き取り

写真① 川口精雄町長から歓迎の挨拶を受けるゼミ生。② 箱作家の地域おこし協力隊員への聞き取り。③ 町産広葉樹を使った木工クラフトの加工施設で。④ 町有林を視察するゼミ生。⑤ 地域おこし協力隊員との意見交換。⑥ 神奈川県から1ターンした酪農家への聞き取り。



●総括

過疎地再生の展望を探ることを学習テーマに掲げる私たちのゼミでは、道内でもひととき困難な状況を抱える道北地方に焦点を当てて調査学習を進めてきた。その中で今回、研修先として中川町を選んだのは、同町が大規模化や効率化とは距離を置いたユニークな林業振興策を展開しており、その姿から山村再生のあり方を考えてみたかったからである。

ゼミ生は、事前学習で町の歴史、産業、政策を綿密に検討していたこともあり、町長や町職員、北大教員によるレクチャーを比較的スムーズに理解できたようである。森林・林業とは縁遠い生活を送ってきたゼミ生にとって、長靴を履いての町有林の視察は、山登りや虫の多さに戸惑いながらも、座学では得られない知見を獲得する貴重な機会となった。地域おこし協力隊員とのグループディスカッションでは、中川町に移り住んだ若者のタフな姿に触れ、自らの進路を考える上で大いに刺激を受けたようである。

地域主体の森林利用の新しい方向性を指し示す取り組みを学んだゼミ生からは、冬場に再訪してより深く中川町のことを調べたいという声が上がっている。研修を経て自ら学ぶ姿勢を強め始めた姿を素直に喜びたいと思う。

学生研修記

石山 和弥

地域経済学科 2年
江別高校出身



なかなかなかかわよいところ

林業政策がスギやヒノキといった単一樹種からなる人工林の利活用に重きを置く中で、道北地方のような天然林の比率が高い地域では現行の政策から取り残される場面も出てきている。今回の研修で訪れた中川町は、町面積の87%が天然林主体の森林に囲まれた林業が基盤産業の町である。中川町では林地残材を活用し一点物の木工クラフトとして商品化したり、旭川家具に広葉樹材を提供したりするなど、天然林を軸とした新たな林業の可能性を追求してきた。こうしたさまざまなアイデアを生み出し実行に移してきたのが、本学OBの町職員である。在学生として誇らしく思う。今回の研修を通し、北海道林業の現状と課題、その解決の方向性を中川町の取り組みから見出すことができ、地域ごとの森林の特性を踏まえた林業を創り出すことの大切さを学ぶことができた。

佐々木 将人

地域経済学科 2年
札幌平岸高校出身



中川町のアイデンティティー

私たちは林業振興に焦点を当てた研修を中川町で実施した。ゼミ生は全員、林業の「初心者」であり、見聞きするもの全てが新鮮だった。町では、日本全体を覆う人工林偏重の政策とは異なり、北海道の森林を特徴付ける豊富な天然林を使った林業振興策が展開されていた。そこでは、環境保全機能と生産機能を併せ持つ複雑さと多様性を兼ね備えた森の育成を目標とした森林管理が行われていた。また、地域おこし協力隊という制度を積極的に使い道内外から人材を呼び込み、木工製品の商品化やブランド化を図っていた。同町の林業施策は政治や経済の流れにただ押し流されるのではなく、地域資源の価値を見直し、それを全面的に活用して町の発展に繋げていくという意図が込められている。中川町のような姿勢で他の地域でも振興策を練り上げることができれば、日本林業の未来は明るくなるのではないかと感じた。



古林英一ゼミ I

参加学生数 12 名



古林 英一

地域経済学科
教授



語り部の伊藤三男氏とともに（港管理組合 展望展示室うみてらす 14 にて）

四日市公害の歴史的教訓と現代的意義を学ぶ

研修地：三重県四日市市

●研修目的

四大公害訴訟はすべての学生が歴史の授業で学ぶことから、四日市ぜん息のことはすべての学生が知ってはいるが、四日市公害が何をもち、現在の四日市はどうなっているのかを知ることで、公害事件の現代的意義を学ぶことが研修目的である。

研修先・日程

9月7日 四日市市に集合後宿泊
9月8日 四日市公害と環境未来館で施設見学と
レクチャーを受講
語り部の伊藤氏の案内で現在の臨海コ
ンビナートを見学
工場夜景クルーズに参加後、四日市市
内で宿泊
9月9日 現地解散

●総括

学生に限らず、四日市市に関してのイメージは公害のイメージしか持っていない人が殆どではないだろうか。多大な犠牲をもたらした四日市ぜんそくはわが国の高度経済成長の影の部分である。現在もなお認定患者は存在し、この事件は完全に過去のものになってしまったわけではない。だが、異臭魚問題が発生した海は今ではまったく綺麗な海になっており、技術改良の成果もあって大気汚染は過去のものとなっている。公害と環境未来館での見学とレクチャーによって、参加学生たちはかつての公害問題の凄まじさと、地域の人々がこの問題にどう立ち向かったのかを改めて深く認識したと思われる。また、工場夜景クルーズに参観することで、公害の元凶だったコンビナートが今では観光資源ともなっていることも知りえた。

教科書で学んだ事柄は事実の断片でしかないことを認識することが出来たことが最大の成果であると思われる。

学生研修記

林 大貴

地域経済学科 2 年
旭川南高校出身



四日市市を訪れて

今回私たちは四日市ぜんそくについて詳しく勉強するために三重県四日市市に地域研修で行きました。

あらかじめゼミで四日市ぜんそくについて勉強して行きましたが、四日市市が過去に四日市ぜんそくの影響があったと思えないほど街が綺麗になっており、正直驚きました。

現地で見られなかったコンビナートの明かりを生かして行われるナイトクルーズは過去に四日市ぜんそくがあったとは思えないほど、綺麗で感動的なものでした。

実際に四日市市に行ってみて、想像とは全然違っていたため、行ってみてよかったと思っています。

船戸 菜摘

地域経済学科 2 年
羽幌高校出身



四日市の過去と現在

私たちのゼミでは環境経済学について専攻していて、特に、公害問題について詳しく学んでいます。今回の研修では、『四日市市で起こった公害について、当時の様子や現在の様子を現地で学ぶ』ということを中心に、三重県四日市市に足を運びました。

四日市市では、当時の様子をよく知っていて、現在も語り部として活動している伊藤三男さんという方にお話を伺ったり、環境未来館や、公害の原因となったコンビナートを見学しました。そこでは、公害の深刻さ、市民の苦しみや悲しみなど、当時のリアルな被害の様子が伝わってきて、教科書だけではわからなかった部分も詳しく知ることができました。

四日市市は、多くの人が『公害問題が起きた街』というイメージを持っていると思います。しかし、実際に現地に行ってみると四日市市のイメージが大きく変わりました。四日市市は、海や空、街並みがとても綺麗で、公害の面影のない、活気ある町へと変化していました。そして、その変化の背景には、四日市の市民や企業など、たくさんの人たちの努力があることがわかりました。しかし、四日市公害により現在でも苦しんでいる公害認定患者がいたり、四日市公害問題は完全に解決したわけではありません。このような公害を二度と起こさないためにも、四日市市民だけでなく、私たち一人ひとりも公害問題についてしっかりと考えを持ち、学んだ教訓を次世代に伝えていくことが重要だと感じました。



写真① 磯津小学校教室に設置されていた空気清浄機（四日市公害と環境未来館）。② 第一コンビナート。③ きれいな海で釣りを楽しむ市民。④ 四日市港ポートビルからみたコンビナート。

工場夜景

古林英一ゼミ II

参加学生数 16 名



古林 英一

地域経済学科
教授



銅親水公園近くにて

足尾銅山鉍毒事件の現場を訪れ、現代への教訓を学ぶ

研修地：日光市（旧足尾町）・栃木市

●研修目的

足尾銅山鉍毒事件は歴史教科書に記載してあることから、ほぼすべての学生が知っているが、それはあくまで過去の事件として学んでいるに過ぎない。しかしながら、閉山後数十年を経た今日においても、煙害や過剰伐採によって失われた森林は未だ回復するに至っていない。足尾銅山事件の今日的意義を改めて学ぶことが研修の目的である。

研修先・日程

8月31日	宇都宮市に集合
9月1日	日光東照宮見学 足尾歴史館で長井館長のレクチャー みどり市に宿泊 足尾銅山関係施設と旧松木村の見学 岩宿遺跡見学 桐生市内宿泊（一部学生とポートレース桐生見学）
9月2日	渡良瀬遊水地会館で飯村氏のレクチャー後、遊水地見学 小山市で解散
9月3日	北見市に移動後宿泊 9月15日 佐呂間町町民センターでレクチャー後、栃木地区見学 札幌に帰着

●総括

足尾銅山の歴史を後代に伝えるために設立された足尾歴史館において長井館長によるレクチャーでは、鉍山の歴史を学ぶとともに、厳しい鉍害問題が存在した一方で、鉍山によって街が栄えたことを改めて知ることができた。また、通常は立ち入りが制限されている旧松木村（鉍害によって廃村になった村）の遺跡を訪れることもできた。

続いて翌日は田中正造らが抵抗を続けた渡良瀬遊水地を訪問し、栃木県庁で長らく治水政策に携わるとともに、当該地域における治水史の研究者でもある飯村氏によるレクチャーを受け、その後、渡良瀬遊水地を訪問し、現在の遊水地が地域の観光資源として活用されている現状を知ることができた。

また、補足的な研修として、旧谷中村を含む当該地域から北海道に移民した人々によって開拓がおこなわれた佐呂間町栃木地区を訪れ、北海道と足尾鉍毒事件が関わっていることも学んだ。

地域研修報告会で、学生たちは「足尾銅山の光と影」というタイトルで報告をおこなうことで、銅山による環境破壊の一方で地域経済が銅山によって成り立っていたことを発表した。現地を訪問することで、教科書で学んだことがすべてではないことを実感できたことが最も大きな成果であろうと思われる。



廃村となった松木村遺構

学生研修記

中老田 真

地域経済学科 3 年
札幌清田高校出身



佐野 菜奈美

地域経済学科 3 年
江差高校出身



足尾銅山を訪れて

足尾銅山へ行く地域研修のテーマは、“教科書に載っている所に行ってみよう”でした。

教科書に載っている場所、出来事を私たちは知っています。しかし、その知っているという事は理解しているとは全く違うのだと今回の地域研修で学びました。

実際に足尾銅山と、その周辺地域に行ってみて、そのギャップに驚かされました。私たちが教科書で学んだ、鉍毒の暗いイメージとは裏腹に町は明るく、町民の皆さんは鉍山が活動していた当時のことを話す時、笑みと共に懐かしみながら語ってくださいました。

事実として見れば足尾銅山は確かに鉍害を広めたのですが、その麓にはそれにより発展し、活気のあった鉍山町が存在していたのです。

その町は最新の技術がどんどん入り込み、鉍山の 24 時間活動に合わせた眠らない町として活動していました。このことから私たちは、無機質な“事実”という情報だけでなく、実際に足を運び生きた情報を読み取る事で、また違った世界が見えるのだと学びました。

足尾銅山の光と影

今回私たち古林ゼミは栃木県の足尾銅山を主なテーマに掲げ、地域研修を行いました。実際に現地に足を運ぶまで、中学・高校で学んできた足尾銅山についての知識しかなかった私の中での足尾銅山へのイメージは正直あまり良いものではありませんでした。しかし、実際に現地を訪れることによって足尾へのイメージは覆されました。鉍毒事件が発生してから何十年と経った今でも通常より木の幹が細かったり、禿山と化していたり被害は残っていたのは事実ですが、当時は銅山の町として人口も多く映画館などの娯楽施設もあったりと街は栄えていたんだよ、と懐かしそうに映像を交えながら当時の足尾を知る方が説明してくださった姿はとても印象的でした。当時の足尾を知る方が減少していつの間で、直接お話を伺うことができたのはとても貴重な経験をする



植林事業（旧松木村）

重なる経験ができたし、今後次の世代にも伝えていくことが大切だと感じる研修でした。

写真 ① 精錬所遺構。② 渡良瀬遊水地。
③ 旧谷中村から移設された墓石。



水野邦彦ゼミ1・11

参加学生数 21 名



水野 邦彦

地域経済学科
教授



笹の墓標展示館（光頭寺）にて

朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修

研修地：幌加内町朱鞠内

●研修目的

朝鮮人労働力が投入された雨竜ダム工事現場、犠牲者が運びこまれた寺、写真や資料の展示館などを訪ね、北海道内でおこなわれた朝鮮人強制労働の実態を学ぶ。

研修先・日程

- 9月17日 朱鞠内湖・雨竜ダム
笹の墓標展示館（光頭寺）
9月18日 ふれあいの家まどか

写真①② 雨竜ダム工事現場の様子。③ 朱鞠内湖・雨竜ダムにて。④ 夕食バーベキュー。⑤⑥ そば打ち体験。⑦ 自分たちが打ったそばの昼食。



●総括

朱鞠内では名雨線鉄道工事につづき 1939 年から朱鞠内湖の雨竜ダム建設工事がおこなわれた。ダム工事には常時 2000 人、最大 7000 人、延べ 600 万人の労働者がかかわり、その平均年齢は 30 歳であったという。ここには朝鮮人も大量に投入され、判明分だけで日本人 168 人、朝鮮人 45 人、計 213 人が死亡したとされるが、朝鮮人死亡者数はいまだ不明確。朝鮮人死亡者の遺体はたいてい林のなかに埋められ、だれがどこに埋まっているのか不明であったが、近年になって遺骨の発掘と返還がつけられている。

工事の犠牲者はいったん光頭寺に運びこまれるのが常であったが、この光頭寺が現在「笹の墓標展示館」として公開されており、いまでも身元不明の遺骨や位牌が保存されている。研修では、この「笹の墓標展示館」で朱鞠内での朝鮮人労働に関する説明をおこなうとともに、展示館内の写真・文書・地図などの資料を学生にみせ、できるだけ当時の労働の様子を肌で感じてもらった。

研修一行は、かつての小学校校舎を改造した宿泊施設「まどか」に泊まり、夜はバーベキュー、翌朝は幌加内町での研修にふさわしく、生産量日本一を誇る幌加内町のそば粉を用いたそば打ち体験をおこなった。

学生研修記

高野 舞菜

地域経済学科 2 年
旭川実業高校出身



考えられないタコ部屋労働の日々

タコ部屋労働には、借金をかかえた本州の都市労働者らが周旋屋の口車に乗せられて投入されていたが、人数が足りなくなると、当時の日本が植民地支配していた朝鮮で人集めがおこなわれ、ときには有無をいわずトラックの荷台に載せられて連れて来られることもあったという。

写真でみたタコ部屋は、とにかく設備が不十分で不衛生、大のおとなが寝るには狭すぎるし、体に悪そうで、毎日こんなところで寝るのは絶対に不可能だと思った。

部屋だけでなく、粗末な食事、苛酷な長時間労働も大きな問題であった。土工夫就業案内にしろされた労働時間割には働く時間が決められているが、休みの時間があまりにも不十分であるし、まともに睡眠する時間がないことがわかる。これほど長時間の肉体労働に労働者が耐えられるとは思えず、死亡者が発生し、逃亡者が現われるのは当たり前だろう。



白山 龍太郎

地域経済学科 3 年
石狩南高校出身



使い捨てにされた労働者の無念

雨竜ダムはたった 3 年で完成したというのだから、労働者の健康など考慮されなかったのだろう。人権無視で、使えなくなったら捨てる。いまでは考えられないことが昭和におこなわれていたのだ。生きたまま人柱にされた人々の無念ははかりしれないものがある。朝鮮人労働者の朱鞠内投入は国が許可したものだとおどろいた。それなのに墓標すらないのはいかがなものか。

光頭寺で見た位牌は生々しいものだった。館内に貼ってあった資料や写真も当時の姿を映し出しており、胸が詰まる思いがした。とくに新聞記事にあった事故の内容はとても悲惨だった。

夏には光頭寺に多くの人々が来場すると知った。過重労働と極寒と衰弱のなかで人生を終えた労働者にいまの人々の思いが馳せられることを願うし、僕たちもまた、北海道開発の礎にはこのような労働があったことを心に刻んでゆきたい。

水野谷武志ゼミ1・II

参加学生数 23 名



水野谷 武志

地域経済学科
教授



北竜町 ひまわりパークゴルフ場にて

買い物難民問題の現状とその対策

研修地：滝川市・北竜町

●研修目的

地域スーパーの撤退が相次ぐことによる買い物難民問題が深刻であり、とりわけ面積が大きく過疎化が進む北海道では切実な課題である。そこで本研修では、道内で買い物難民問題に取り組む2つの先進的領域を調査し、改善策や今後の課題について考えることを目的とする。

研修先・日程

- 8月28日 滝川市下見(市役所、滝川駅や中心市街地、イオン、東滝川地区など)
- 8月29日 滝川市職員による講演・意見交換会(滝川市役所)、滝川市郷土館を見学
東滝川連合町内会会長による講演・意見交換会(滝川市東滝川地区転作研修センター)
東滝川地区住民に聞き取り調査(同センター)、セイコーマート東滝川店周辺の住民に聞き取り調査
- 8月30日 北竜町職員による講演・意見交換会(北竜温泉会議室)
北竜町郷土資料館を見学
Aコープ北竜町店周辺の住民に聞き取り調査
- 8月31日 北竜町ひまわり長寿会連合会役員との意見交換会(北竜温泉会議室)
パークゴルフコンペ(ひまわりパークゴルフ場)
打ち上げBBQ(金比羅キャンプ場)

写真① 滝川市役にて意見交換。② 北竜温泉の宿でミーティング。③ ひまわりの里をバックに。④ 北竜町郷土資料館を見学。⑤ 北竜町で聞き取り調査。⑥ 北竜町民との意見交換。



●総括

Aコープ閉店をきっかけに動き出した2つの地域、すなわち①セイコーマートを誘致して「ミニ・セコマ」第1号店が2017年5月にオープンした滝川市東滝川町、②スーパーをふくむ複合商業施設が2018年春にオープンする北竜町を調査対象とした。

①では、町内会を中心とした市民による地道で直向きな誘致活動、地域貢献を理念に掲げるセイコーマートがこれに応えたこと、さらにセイコーマートがAコープ店舗を再利用することで初期費用を抑えることができたことが鍵であった。住民主導によるコンビニ誘致が成功した事例として注目できるが、品揃えの充実や売上維持などの課題について、地域住民とセコマが今後も協力関係を築いていくことを期待したい。

②では、町唯一のスーパーの撤退を町のインフラの危機と捉え、国の助成制度申請による複合商業施設の建設を町役場が主導したこと、スーパーの商品納入においてコープさっぽろの支援を受けることができたことが鍵であった。北竜町で新たに開設される複合商業施設が町民の理解と協力の元に売上を保ち、町の新たな拠点として機能することができれば、買い物難民問題対策の1つのモデルとなる可能性を秘めていると感じた。

学生研修記

高貝 偲乃

地域経済学科 2年
士別翔雲高校出身



買い物難民問題を調査してみよう

水野谷ゼミは買い物難民をテーマとして滝川市東滝川町と北竜町を調査してきました。東滝川では唯一のスーパーであったAコープが撤退してしまい、町内会を中心としたコンビニ誘致により道内初のミニセコマが出来たとして新聞などで取り上げられていました。ミニセコマはコンビニであるため値段が高いことや商品の種類などは限られていますが、長時間の営業や日曜日も営業していることでいつでも買い物に行けて、休憩スペースで会話ができることが嬉しいなど、実際に町内会長や住民の人から話を聞いて、近くに買い物ができる場所があることは高齢者や車を持っていない人達にはとても大切だと感じました。今回の研修で買い物難民が問題となっているところは過疎地域でもあり、地域住民の一人ひとりが問題と向き合うことが必要であることを学ぶことができました。

工藤 諒也

地域経済学科 3年
旭川実業高校出身



北竜町の買い物難民に対する取り組み

今回、水野谷ゼミは買い物難民というテーマで滝川市と北竜町に行きました。北竜町では、Aコープというスーパーの撤退が決まり、新しい複合商業施設が建設されるという新聞記事を見て実際に現地に行きました。

自分達はアンケート調査を行い、Aコープの撤退と複合施設の建設について町の人達の話聞くことができ、住民の意見を町に反映させていくことが重要だと考えました。住民の意見が取り入れられ、複合商業施設がオープンするまでの空白期間に移動販売が導入される予定です。

今回の地域研修では自分の行ったことのない町に行き、新たな町の魅力に気づくことができ、その他の町にも様々な町の魅力があり、町が維持できているのではないかと感じ、学ぶことが出来ました。



宮入隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 24 名



宮入 隆

地域経済学科
教授



上川農業試験場にて

北海道稲作の現状と道産米販売戦略の方向性

研修地：新十津川町・深川市・旭川市・当麻町・比布町

●研修目的

道内の稲作中核地帯を形成する空知北部・上川中部をめぐる、北海道稲作の現状と課題を農協および生産者グループ、育種を担う農業試験場への実態調査から明らかにし、また販売状況や実需者の評価を踏まえて、今後の道産米販売戦略の方向性を検討することを課題とした。

研修先・日程

9月22日	JAピンネ（新十津川町） 金滴酒造（新十津川町）
8月23日	JAきたそらち（深川市） （当麻グリーンライフ（当麻町））
8月24日	上川農業試験場（比布町） ホクレン旭川支所（旭川市）

写真①② JAピンネのカントリー・エレベーターにて。③ 金滴酒造で醸造施設の見学。④ JAきたそらちでの研修風景。⑤ 宿泊施設での夕食風景。⑥ 上川農業試験場にて。⑦ ホクレン上川支所での研修風景。



●総括

北海道は全国有数の米の生産量とともに、近年は良食味米生産に力を入れ、品質面でも高い評価を得ている。それを育種面から支える上川農業試験場では、現在、食味の向上だけではなく、消費需要の変化に対応して、外食・中食など用途別品種改良にも取り組んでいた。金滴酒造では、道産の酒造好適米の評価として吸水性に課題があるとしつつも、地場産原料を活かした醸造に力を入れている。

他方、各産地では、担い手の減少を個別経営の規模拡大により作付面積を維持している実態が明らかになった。生産面での最大の課題は、労働力不足を補うための省力化技術の導入である。また、農協調査からは、集荷した米を高品質仕分け等の努力により、食味の向上とともに均質化を実現し、多様な商品アイテムを提示することで実需者から「選んでもらう産地」になることを実践していた。有機農業に取り組む先進的な生産者組織・当麻グリーンライフでは、高付加価値化の実状を垣間見るとともに、消費者に支持されることの大切さを教えて頂いた。

ゼミ生たちは、品種改良を土台に、集出荷面での高品質化と、用途別に合わせた生産・販売方式の確立が今後の道産米販売戦略の課題であると結論づけた。

学生研修記

飯坂 研哉

地域経済学科 3年
留萌高校出身



多くの発見から北海道農業の課題を考えた

私たち宮入ゼミは、北海道の米生産の課題を探るため地域研修に行ってきました。直接、現場でお話を聞くことで、多くの新たな発見がありました。

まず、最初に調査した JA ピンネと JA きたそらちでは、同じ農協であっても、事業の性格は管内とする地域の特徴によって異なるということが分かりました。例えば JA ピンネでは、品質を重視しているが、JA きたそらちでは安定的な販売を目指しているということです。また当麻グリーンライフでは有機栽培や特別栽培といった農業の取り組みについて教えて頂きました。その中で、化学肥料などの使用を抑えることで収量は落ちてしまうが、単価は高くなることなど、慣行農法とは異なる経営展開もあることを知りました。

私はこの研修を通じて、グローバル化する食料供給の中で、北海道農業は地域の特性を活かし、さらにブランド化を進めるべきだと実感しました。

池田 梨乃

地域経済学科 2年
深川西高校出身



地域研修から見てきた北海道稲作の現状

私たちのゼミは「北海道稲作の現状と道産米販売戦略の方向性」をテーマに掲げ、北海道の主要稲作地帯である空知、上川を事例に調査を行いました。

北海道稲作の現状として、後継者不足や労働時間の限界、価格の不安定さなどが明らかになりました。とくに農協調査で事例とした2農協を比較することにより、JA ピンネは小規模産地ながら品質重視、JA きたそらちは大規模産地であり安定的販路の開拓を目指しているなど、各農協の事業展開の方向性が異なっていることが印象に残りました。

農協の他、上川農業試験場、当麻グリーンライフ、金滴酒造の調査も含めて、道産米は、全国的に人気は上昇しているものの、米の需要は減少しており、様々な課題があることが分かりました。その中で、生産技術の向上や品種改良、高品質仕分けによる均質化、需要に合わせた商品化などの意義が明確になりました。



2部宮入隆ゼミ1・II

参加学生数7名



宮入 隆
地域経済学科
教授



和寒町役場にて

地域農業振興と農協の役割—和寒町を事例に— 研修地：和寒町

●研修目的

道北地域において稲作・野菜複合産地として存立し、カボチャや越冬キャベツの産地として有名な和寒町を事例に、農協のほか、生産者や自治体への調査を通して地域農業振興の現状と課題を、とくに農協の役割に着目して明らかにすることとした。

研修先・日程

- 8月30日 和寒町役場産業振興課
農業者調査①（西川直哉さん）
- 8月31日 JA北ひびき和寒基幹支所
農業者調査②（松本学さん）

写真① 塩狩峠にて。② 松本農場での調査。③ 和寒町の水田にて。④ JA北ひびき和寒基幹支所での研修。⑤ 西川農場での聞き取り調査。⑥ 西川農場にて。⑦ 和寒町の水田発祥の地。



●総括

北海道の稲作地域は、担い手の減少が著しいが、和寒町は上川管内でも比較的后継者のいる農家割合が高いという特徴を有している。その要因の1つは、町主導で後継者育成振興奨励事業を推進し、農業活性化センターでの研修生の受け入れなど担い手対策を行ってきたことである。また減反政策以後、カボチャなどの産地形成でも、自治体と農協が一体となってブランド化を進めてきた。

農家調査では、稲作を中心とした土地利用型経営と、野菜を中心とした6次産業型経営を比較し、各経営が自らの経営方針に合わせて農協を利用している実態をみた。さらに農協では、カボチャとキャベツの販売事業から産地組織としての農協の役割について調査を行い、販路開拓など農協事業の重要性を改めて認識した。また、事例としたJA北ひびきには、准組合員も含め、約3割の地域住民が組合員として農協を利用しており、農村部においては信用・共済事業など様々な面で農協が地域社会を支えていることも明らかになった。

これら調査結果から、ゼミ生たちは、総合事業を行う日本型農協の役割の大きさを実感するとともに、農業振興と地域活性化を関連づけて進めていくことが重要だと総括した。

学生研修記

久保田 勝也
地域経済学科2年
江差高校出身



農業を核とした産業の創出を！

和寒町農業は減反政策によって、稲作専業経営から稲作・野菜複合経営へと変わり、カボチャやキャベツの作付面積が増加しました。これら2品目の産地形成は成功したのですが、一方で、カボチャなど野菜導入による雇用労働力不足が課題となっていることを知り、産地維持の難しさを実感しました。

和寒町は地域全体としても人口減少や労働力不足が課題ですが、農業を核とした産業の創出が、さらなる地域の魅力、ブランド力強化につながれば、人口増加に結び付き、雇用労働力供給も相乗効果で期待できると思いました。

また、2つの農家を調査しましたが、生産技術重視型経営、6次産業化型経営など、農家は経営形態が多様であるということを知りました。各農家は、自身の経営方針に合わせて農協事業を利用することができるので、すべての農家にとって必要不可欠な存在になっていると感じました。



糸永 奏一
地域経済学科2年
旭川実業高校出身



地域の皆さんとふれあった貴重な体験

私たちは、地域農業振興における農協の役割をテーマに、和寒町役場、JA北ひびきのほか、西川さんと松本さんという2人の農業者を対象に調査を行いました。多くの方からお話を聞き、カボチャなど野菜の導入によって雇用労働力が不足していること、自治体と農協が連携連携することの重要性、そして、各農家の農協利用の相違点などの様々なことを学ぶことができました。普段知りえない地域の実状や対策をうかがい、座学以上に地域経済の問題が理解できたように思います。

さらにいえば、地域の課題を理解しただけではなく、研修でお世話になった皆さんの温かさに触れることができたことも大きな収穫でした。地域のことが何も分からない私たちに、夜までお付き合い頂き、お話を聞かせてくれるなど、まさに地域研修でなければならない体験をすることができました。皆さんありがとうございました！



山田誠治ゼミ I

参加学生数 15 名



山田 誠治

地域経済学科
教授



富良野駅前で

富良野のブランド力はどのように維持できているかを探る

研修地：富良野市

●研修目的

人口2万人という小さな街にもかかわらずブランド力の高い富良野地域の魅力と、広域的な観光地域としての実情を見るため、富良野のブランド力のあるスポットを訪ね、そのブランド力がどこからくるのか、またどのような人がどんな工夫をしているか、をテーマにした。

研修先・日程

- 9月14日 美瑛の丘
ファーム富田・アンケート調査
ニングルクラス
- 9月15日 フラノマルシェで説明会
観光コース別・グループ調査

●総括

かつて、富良野の観光は大資本によるスキー場の開発、さらに「北の国から」等のドラマや映画撮影から知名度が高まり、メディアを通じて情報を発信してきたことが観光のブランド力を高めてきた。今回の訪問では、学生たち（既にそのドラマは知らない世代）にとって、地産地消を随所で生かした観光資源の開発や、少ない人口にもかかわらず、様々な工夫と連携で、観光資源を生かし切っている富良野という地域の特徴とブランド力の強さを実感できたのではないかな。

一日目はファーム富田で訪問観光客のインタビュー調査を行ったが、農業や豊かな自然を生かした風景を武器に、一連の流れが富良野では完成されていて、広域地域で毎年一定数の観光客の確保に繋がっていることか実感でき、またデータの的にも裏付けられるものであった。

二日目には、午前はフラノマルシェのまちづくりについての解説を聞き、午後は富良野の5つの観光コースをグループ別に実際に体験、その担い手、工夫などについてインタビュー調査を行った。見て楽しめる、味で楽しめる、そして観光の担い手についても、素晴らしい富良野の街と自然での仕事に誇りを持っていることもこの地域の強さであることを理解できたと思う。

学生研修記

宮崎 将伍

地域経済学科 2年
豊富高校出身



島部 吏紗

地域経済学科 2年
帯広大谷高校出身



体験から、地元の資源に根差した観光を実感

私は、富良野の地域ブランド力とその魅力を探るため、グループ別による調査で、乗馬体験コースを担当しました。そもそも、私は、富良野には何度も訪れたことがあり、観光資源や地元の資源などは見慣れたものが多かったのですが、富良野マルシェについての話も聞き、その取り組みに改めて感心させられ、また、担当した乗馬体験では改めてその魅力を発見させられました。

乗馬は、今注目されている体験型観光ですが、北海道・富良野の自然をいっぱい活用しており、スタッフの方の出身がいずれも道外からの方でしたが、北海道の自然に魅かれて今の仕事に従事し、また、乗馬体験の馬はかつての競走馬が、余生の働き場所として活かされるというものでした。豊かな森に囲まれた自然の中を馬に乗って周回できる体験は、富良野の豊かさとその展開のうまさを実感できるものでした。

森のチーズ工房を訪ねて地産地消を実感

私は、富良野のグループ別調査で、森のチーズとピザ工房の調査を担当しました。駅前からはかなりの距離で、自転車での移動では坂も越え、森の奥までかなり大変なものでしたが、当日もたくさんの観光客が訪れており、自然の中の立地が魅力の要因と思いました。

売店や工房スタッフのみなさんへのインタビュー調査からは、地元の方が多く、この土地の自然と街の魅力に惹かれて仕事をされている、という感じでした。チーズ工房では実演を見ることができ、子どもたちでもできるような工夫が随所に取り入れられ、年齢を問わず多様な観光客が満足できるような仕組みになっており職人さんたちの対応も素晴らしいものでした。チーズもピザも地元産の牛乳や小麦が使われており、その立地や施設、そして地産地消を観光資源として展開していることが改めて理解できました。

写真 ① 富良野の観光エリアは広いのだ。② 富田メロンハウスでカップルにインタビュー調査。③ ファーム富田でインタビュー調査。④ 杜の中のニングルテラス。⑤ フラノマルシェで説明会。⑥ ガラス工房の体験観光を体験。



山田誠治ゼミ II

参加学生数 13 名



山田 誠治
地域経済学科
教授



草津温泉観光協会にて

東京の北海道ブランドを探り、草津温泉から学ぶ 研修地：東京都・群馬県草津町

●研修目的

今回の地域研修のテーマは二つあり、一つ目は東京での北海道ブランドの一端を探ること、二つ目は札幌の定山溪温泉の活性化を考えるため、その対比を意識して日本で名高い草津温泉の実態を知り、温泉による活性化の取組と課題を探るというものであった。

研修先・日程

- 9月26日 北海道フーディスト（東京駅前）
チーズの森（足立区）
どさんこプラザ（千代田区）
チーズのこえ（江東区）、経営者・今野さんから解説
- 9月27日 築地市場
- 9月28日 草津町温泉街実地調査
草津温泉観光協会会長・中澤さんから解説
- 9月29日 草津温泉街インタビュー調査

写真① 築地には道産品がいっぱい。② 素敵なお店「チーズのこえ」。③ 北海道の多彩なチーズがここに。④ 草津の中心「湯畑」。⑤ 草津温泉周辺にもスポットがたくさん。⑥ 草津温泉観光協会中澤会長よりまちづくりの講義。



●総括

東京都内の北海道ブランドの調査については、どさんこプラザなどのアンテナショップでのグループ・インタビュー調査、および築地市場の現地調査を行うとしたが十分結果を出せなかった。しかし清澄白河の道産品販売店「チーズのこえ」の訪問とその経営者の今野さんの解説から多くを学べた。一つ一つは小量ながら非常に多彩な北海道各地のチーズの販売を、消費者との強く長いつながりを築くことで需要家を獲得するという戦略で、氏が考え抜いた方法とその工夫からは多くを学べたのではないかと。

また、草津温泉では、観光協会会長の中澤さんから温泉をめぐるまちづくりの話が聞け、その目線で現地でのグループ・インタビューとスポットを巡ることで、草津のまちづくりの理念やその先進性について実感でき、優れた観光資源と立地をさらに生かしきっている草津温泉のまちづくりが日本一と評価される理由が理解できたのではないだろうか。

「チーズのこえ」の今野さんの理念「100年続くものづくり、1000年続く地域づくり」や、草津町の町民憲章「歩み入る者にやすらぎを 去り行く人にしあわせを」に見られるように、理想や練り上げられた考えに基づいた事業展開の実例を学べたことは、非常に大きな収穫であったと思う。

学生研修記

山本 真由
地域経済学科 3 年
札幌清田高校出身



チーズのこえの経営理念に感心

私たちは、北海道のチーズの魅力を広めるためのショップ「チーズのこえ」を訪ねました。経営者の今野徹さんは、公務員から一転起業をし、「100年続くものづくり、1000年続く地域づくり」を経営理念として、チーズ販売や様々な事業に取り組み、驚いたのは、広告や宣伝にはお金を一切さかず、テレビ、ネット利用にとっても否定的なことでした。そのような方法からでは一時的な人気・話題性しか得られず、「本当に北海道のチーズをたくさんの人に知ってもらふ」には継続してチーズを買いにきてくれる顧客や北海道のチーズに興味を持って来てくれる顧客を獲得し、お客さん一人ひとりのコミュニケーション、つながりを大事にしていきたいから、ということでした。清澄白河というあまり人通が多くないところにわざわざ買いに来てもらうだけの価値を創造し、その考え抜かれた方法に感動しました。



河奥 公貴
地域経済学科 3 年
滝川西高校出身



五感で感じられる温泉のまちづくり

私たちは、温泉の町づくりで先進的な草津温泉を訪問しました。草津観光協会の会長中澤敬さんによると、「Brand & Brand Extension」戦略として、地域ブランドそのものである温泉と、そこを取り巻くもの（歌や温泉まんじゅう、クラシックフェスティバル、サッカー、など）を互いに連携させ、その結びつきを広げていくことで、草津全体が活性化するプロセスを構築してきた、との話でした。また、五感で感じられるような温泉街づくりを心掛け、旅館内だけではなく夜景や景色など町全体で草津を感じられるようにしており、さらには湯の町草津という「和」のイメージとスキーやペンションといった外周も取り入れ、伝統ばかりではない街づくりを心掛けていることが実感できました。立地や温泉資源そのものの良さを町全体で生かし切っている点に、私たち札幌定山溪温泉にとっても学ぶべき点があると思いました。



総勢で24ゼミが2日間に分かれ、3つの教室で発表しました。報告会では、それぞれのゼミが事前学習と現地調査の結果をまとめ、そこから得た成果と課題について発表しました。昨年に引き続き教員コメンテーター制を導入し、各ゼミの発表に対して質問や講評を出して、学生と意見交換しました。

◎11月25日 報告ゼミ順序と研修地

- 40番教室 コメンテーター：浅妻先生(司会)・徐先生
 - ①浅妻ゼミⅡ(伊達)
 - ②徐ゼミⅠ・Ⅱ・2部(旭川)
 - ③水野ゼミⅠ・Ⅱ(幌加内)
 - ④宮入2部ゼミ(和寒)
- 50番教室 コメンテーター：川村先生(司会)・西村先生
 - ①西村ゼミⅠ・Ⅱ(静岡)
 - ②川村ゼミⅠ(札幌)
 - ③早尻ゼミⅠ(中川)
 - ④浅妻2部ゼミ(伊達)
- 16番教室 コメンテーター：宮入先生(司会)・中園先生・濱田先生
 - ①中園ゼミⅠ(札幌)
 - ②宮入ゼミⅠ・Ⅱ(新十津川)
 - ③佐藤ゼミⅠ・Ⅱ(ニセコ)
 - ④濱田ゼミⅠ(網走)

◎12月2日 報告ゼミ順序と研修地

- 40番教室 コメンテーター：内田先生(司会)・佐藤先生・水野谷先生
 - ①大貝ゼミⅠ(別海)
 - ②内田ゼミⅠ・Ⅱ(留萌)
 - ③水野谷ゼミⅠ・Ⅱ(滝川・北竜)
 - ④中園ゼミⅡ(札幌)
- 50番教室 コメンテーター：古林先生(司会)・早尻先生
 - ①大貝ゼミⅡ(高知)
 - ②古林ゼミⅡ(日光)
 - ③山田ゼミⅠ(富良野)
 - ④浅妻ゼミⅠ(伊達)
- 16番教室 コメンテーター：山田先生(司会)・水野先生
 - ①大貝2部ゼミ(栗山・三笠・小樽)
 - ②古林ゼミⅠ(四日市)
 - ③山田ゼミⅡ(草津)
 - ④川村ゼミⅡ(札幌)



北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2017



表紙・裏表紙(下)：早尻ゼミⅠ（中川町）

裏表紙(上)：古林ゼミⅡ（栃木県日光市／旧足尾町）

北海学園大学 経済学部

〔経済学科・地域経済学科〕

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL：(011) 841-1161（内線2222）

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2018年3月発行

制作(株)ラボット